



福井県

中学校長会の窓

福井県中学校長会
福井県中学校長会広報部
伊部印刷株式会社
越前市家久町 29-8-1
TEL(0778)23-5037

第151号

令和8年2月16日発行

会長挨拶



福井県中学校長会

会長 野路 佳男

(明道中学校)

今年一年を振り返りますと、県内の校長先生方とともに、様々な教育課題について真摯に向き合い、ともに考え、取り組んでいただけたことに、心より感謝申し上げます。

これまでの常識が通用しないことが当たり前となり、変化への対応が求められる学校経営に、日々御苦労されたことと拝察いたします。

現代は、将来の予測が困難な「VUCA(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)」の時代と呼ばれています。中学校教育も大きな転換期を迎えており、少子化・人口減少・高齢化・グローバル化に伴う国際的地位の変化・地域間格差・社会的つながりの希薄化など、様々な社会課題が顕在化しています。

これからの社会を見据え、と、予測される課題への対応と、予測できない未来を自ら創り出

す力の双方が求められます。AIやロボットの進展により、労働市場や必要とされるスキルは大きく変容していくでしょう。経済的な豊かさだけでなく、精神的な充足や健康を含めた「ウェルビーイング」の考え方が重視される時代です。こうした中で、「持続可能な社会の創り手」としての人材育成が、教育に課された重要な使命となっております。

一方で、中学校教育の現場には、いじめ、不登校の増加、ICT機器を介した問題行動、特別な支援を要する生徒の増加、部活動の地域展開や中体連の在り方など、課題が山積しています。これらの解決には、教職員のみならず、家庭や地域の教育力、関係機関との連携が不可欠です。

十月には、全日本中学校長会研究協議会香川大会に参加し、

文部科学省初等中等教育局主任視学官・田村学先生より、初等中等教育の諸課題について御講演をいただきました。次期学習指導要領に向けた検討内容として、以下の四点が論点として挙げられていました。

●「質の高い授業づくりに直結する、分かりやすい学習指導要領の構築」

●「多様な子供たちを包摂する、柔軟な教育課程の在り方」

●「教科等における改訂の必要性」

●「過度な負担を生じさせずに趣旨を実現する方法」

また、課題としては以下の三点が示されました。

●「主体的に学びに向かうことができていない子供の存在」

●「学習指導要領の理念や趣旨の浸透が道半ばであること」

●「デジタル学習基盤の効果的な活用」

特に中学校において大きな課題となるのは、調整授業時数制度による柔軟な教育課程の

導入です。授業時数の裁量が学校に委ねられる一方で、責任も大きくなる懸念があります。一、〇一五時間という枠は同じでも、学校ごとに内容が異なる可能性があり、保護者や生徒への説明、校長交代時の継続性など、現場に混乱を招く恐れもあります。

「不易と流行」をどう捉えるか。変化する社会の中で、中学校が果たすべき役割を明確にし、働き方改革の進展とともに、その使命を共有しながら、未来を担う子供たちの育成に努めていく必要があります。福井県中学校長会としても、情報を共有し、知恵を出し合いながら、チーム福井として一丸となって課題に向き合っていくことが求められます。

会長として至らぬ点もあつたかと存じますが、一年間にわたり御協力いただき、誠にありがとうございます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。



第76回

全日本中学校長会研究協議会香川大会

文部科学省説明

「次期学習指導要領に向けた検討について」

文部科学省 初等中等教育局

主任視学官 田村 学 氏



(紙面の都合上、説明内容を一部省略・抜粋・編集させていただきました。何卒御了承ください。)

学習指導要領、教育課程の基準の改訂がまさに山場を迎えていますので、情報提供し、共有とすることで進めていきたいと思っています。

さて、皆さんの中では、この教育課程の基準の改訂についてどれくらい情報をおもちかというところがあるかと思えます。

それぞれ皆さんの状況は様々だと思えますけれども、ここまでに皆さんの情報を供給し、動画も御覧いただけるようにしてきましたのですけれども、情報量はかなり過多になっていると思います。日々の教育活動を行いながら、全てを消費するというの



は難しいと思いますが、論点整理なるものが出ましたので、ここで一旦情報をぎゅつとキャッチしていただくグッドチャンスということかと思えます。

御存じのとおり、昨年の十二月に大臣諮問が出て、つい先日九月に論点整理がまとめられました。ある意味、中間的な整理が行われたということになります。

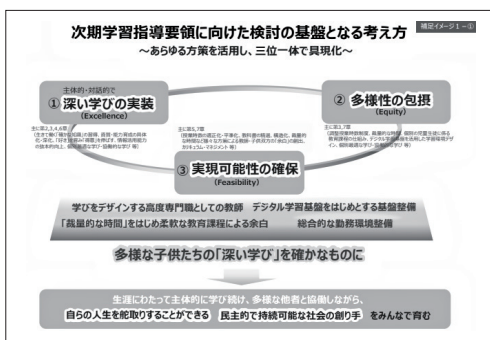
この後、来年中におよそまとめられ、答申、そして来年度中に改訂告示と、こんなスケジュール感が見えるということになります。その意味では、大臣諮問は大きく前半の審議理由と審議事項。大臣の方からはこんな形で、社会状況、学校状況を踏まえて三つの課題などを視野に入れたら、即可能なものを作っていきますましよう。その上で審議事項は一個、二個、三個、四個、こんなふうに整理がされています。

今回の改訂はかなり幅広い対象を視野に入れたものになっていく。このタイミングでぜひ多くの情報をキャッチしていただき、今日明日の御議論の基盤にしていただければと思います。一番のメインのペーパーがこちらになります。学校現場の先生

生方がおそらく一番押さえるべきは、多様な子供たちの深い学びを確かなものに、ここになるかと思えます。

要素は三つです。多様、そして深い学び、そして確かに、こんな感じですね。

一番メインは深い学び、こんなふうに考えていたかどと分かりますかと思えますが、三位一体に充実していこうと。今回の教育課程の基準の改訂は、学習指導要領のみではなくて、条件整備なども視野に入れた、かなり広範にわたるものになっています。とりわけ、学校長の皆さんには、関係が深いのではないかとと思えます。



〈R7_0925 教育課程企画特別部会論点整理より抜粋〉

主要な論点はいくつかあるのですが、全てというわけにはいきませんが、この四つを今日は取り上げて、皆さんと一緒に共有し、まずはレビューした後に、少し具体のイメージをお伝えしていきたいと思えます。

キーワードは、構造・柔軟・探究・評価、こんなふうに考えていただければと思います。

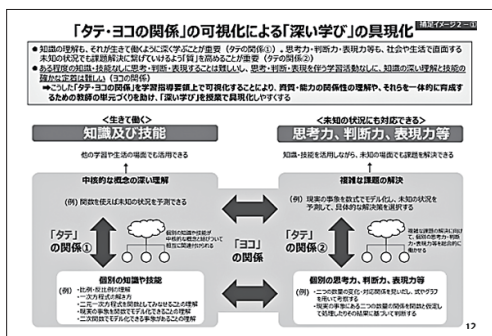
まずは構造の話です。先ほどの大臣諮問のこの一枚の中の一番に出てくるのが、この学習指導要領の構造化ということになります。

我々の身の回りには、事実に関する知識があります。これを宣言的知識、○○は○○であり、一方、こうすればこうなるという方法に関する知識があります。これらは一体化すると方略といったものになります。左側のような事実に関する知識は、より上階層の概念、一方、方略といったものは個別のものから、もうちょっと汎用的なもの、まあこういうふうな知識構造があった時に、これまで我々はどちらかというと、この下階層を一生懸命子供たちに教え、伝え、暗記、こんなイメージがあったわけなんです。もちろんそれも重要なんだけど、もうちょっと上階層を大事にしていこう、こんなイメージになるかと思えます。

と考えると、こんなイラストを見たことがある方が多いのではないかと思います。下のYコ関係、そしてタテ関係、こういったものを大事にしながら構造化していこうと。これ例えば、サンプルですけれども、一つは中学校の数学の学習指導要領、下にある個別の知識技能と右側

の個別の思考・判断・表現は、知識を使って思考・判断・表現が発揮されて、知識がより安定し確かなものになる。結果的には、一個一個の知識はより統合されて概念といったものになり、先ほどの一個一個の思考はより汎用的な方略になっていく。こんなふうに構造イメージがもてるかと思えます。

これまで学習指導要領は五年分なので、一文で書いてある。ちよつと分かりにくいところがあった。こんなふうにするとうり式にできるのではないかと。



〈R7_0925 教育課程企画特別部会論点整理より抜粋〉

表のよさは三つです。一個は要素が分かりやすい、二個は関係性が分かりやすい、三個は俯瞰して見ることが出来る。まあ、こういったことによつて、学習指導要領を分かりやすく使いやすいものにしていこうと。先日の全体の論点整理が出た後の各教科等のワーキンググループが始まりましたが、その

総則評価部会では、個別の知識や技能・思考・判断・表現といった資質・能力に対して、より高次の資質・能力といったものを育成することが重要で、それらはより統合的な理解や、より総合的な発揮といったものを視野に入れていく必要があるのではないかと、というような整理がされているところだ。

なぜ、このような学習指導要領の構造化をするかといえば、まさに深い学びを実現していきたいという方向性があるということをお確かめいただければというふうに思います。

今後の各教科の議論にも注目いただければと思います。

二つ目が柔軟ということになります。こちらは教科提案性ですが、この二番目のところに出てくる、このことということになるわけですが、興味があるのが東京の目黒と渋谷の挑戦ということになります。

この目黒区の挑戦は何かというと、御存じのとおり、全国の小学校、中学校、単位時間は四五分、あるいは中学校五〇分なんですが、目黒の場合はこれを四〇分、四五分までできないかという挑戦をしています。ですから、縦をこれ単位時間にする横がコマ数です。まあ仮に小学校の四年生で考えるならば、縦が四五で横が一、〇一五つてこうなるわけですね。文科省的には、この縦を変えても構わないが、

この総面積は維持してほしいと言っているわけだ。

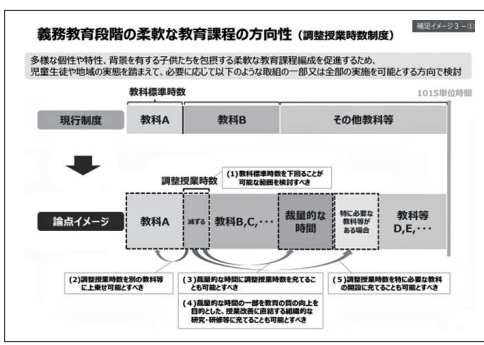
つまり、縦が一〇でもいいんだけど、横が一、〇一五ではとても小さくなりますから、面積は維持してほしい。そうすると目黒のようにこんなふうになんか短くすることはできるんだけど、当然横が飛び出すということになります。目黒の場合は、これを研究開発学校という制度の下、飛び出した部分を実施しない形でなんとかできないか。つまりこの部分が簡単に言うと余裕、余白、ゆとりになるわけです。それを、学校固有の教育活動や、あるいは先生方の研修みたいなことに充てられないかという取り組みをしている。

東京の渋谷の場合は、各教科等の中で一〇%ほど時間を減らしてという時数特例という制度があるんですね。これも減らしたままじゃまずいので、ちゃんとどこかに、総合的な学習の時間を中心とした探究に残す。結果的には、渋谷の場合はその探究なるものが二〇〇時間以上になるので、乱暴に言うところでは、ここが教科で、ここは総合みたいなやり方もできるのではないかと。これも時数特例という制度のもとなんですけど、こういう特別な制度におけるやり方を、もうちょっとどの学校でもできるような方向性はどうでしょうかというふうな議論が起きていくというところです。

簡単に申し上げれば、これま

で私たちの国の中学生の容量は基準性、共通性がきちんと担保されているわけだ。そのことを前提としながらも、もうちょっと各学校の固有性や独自性といったものを発揮していく必要があるのではないかと、こういう議論になっているんだと思います。

このブルーのところがちよつと減った時に、教科で増やすとか、あるいは裁量的な、これが調整授業時数制度といった形になっていまして、今後こういったことを全国の学校がある程度自由にできる方向性を考えてはどうかという議論が進んでいる。



〈R7_0925 教育課程企画特別部会論点整理より抜粋〉

とりわけ、このことについては来年度から先取りということですが、研究指定に手を挙げていたことができるような方向性についているところかと思えます。

トップリーダーの校長先生方にお話を伺いますと、いろんな声があります。ある方は是非やりたいと。こうやって自分の学校の、私たちの地域の、おらが学校の特徴を出したいよとおっしゃる方もいれば、そうでない方もいるところではありますが、さあ皆さん、どうでしょうか、どんなふうになさりたいか。

おそらくトップリーダー一人の腹づもりで決めるようなことではないと思います。教育委員会や地域と御相談ということになると思いますが。

様々お考えあるところだと思えますけれども、現時点の議論においては、このような調整できるような授業時数の関係については、目が向かないということではなくて、ぜひやりたいというふうなところが話になつているところかと思えますので、その意味では、いろんなことを今のうちから御準備いただいたり、お考えいただいたりすることは、かなり重要ではないかと思えます。

続いて、探究の話に入っていきます。三番目の表になりますが、この鍵は情報活用能力の抜本的な向上と一体的に進めようということだ。

ですから、探究のメインである幼児教育からの生活が学習の時間、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間といったものを充実させていくとともに、ここに情

報活用能力と一体として、さらに確かなものにしていくこと。

小学校の総合的な学習の時間には、情報の領域を加えて、もっとパワフルにできないか。中学校においては、これからは情報・技術科といった、仮称ではありますけど、そういったものを位置付けることによって、より探究との親和性を高くしていく。高等学校は教科情報といったことになっていまして、おそらくこの探究をこれから中学校においてどんなふうにも本物にしていくかは、かなり問われる重要なポイントになってくるかと思えます。



〈R7_0925 教育課程企画特別部会論点整理より抜粋〉

簡単に申し上げますと、熱心に行っていた小学校に対して、高等学校の探究はかなりのこの一〇年間でグッと進化したとは思っています。

一方、中学校においては、そういったことにアクションを起こしながらそうではないところも、

私は散見するように思います。先ほどの学校の固有性、独自性といったことに加えて、この辺をトップリーダーの校長がどのようにお考えになるか。

もう一個は評価です。

評価については御存じのとおり、メディアでもだいたい報道がされました。いろんな情報をおもちかと思いますが、若干誤報道的なところがあったり、誤解をされている方がいたりするように思います。

評価に関しては、御存じのとおり、現在、私たちの国においては目標に準拠した観点別の学習状況評価といったものを行っているわけです。観点別というのとは、知識・技能、思考・判断・表現、学びに向かう力・人間性、このことを評価していく。

しかしながらこの学びに向かう力・人間性というのは、かなり感性ですとか、一人一人のその人間性みたいなものが入るので、主体的に学習に取り組む態度というふうにして評価をしていこうということになっているわけです。

このような方向性、大きな観点別の学習状況評価については、変えるという議論は一切あ

りません。したがって、今後この三つについて丁寧に評価をしていくということは変わらないんです。

ですが、この学びに向かう力・人間性、主体的に学習に取り組む態度について、ちょっと議論が出ているところを受けて、何か主体的に学習に取り組む態度はもう評価をしなくていいんですね、というふうな誤解がある方がいるようです。

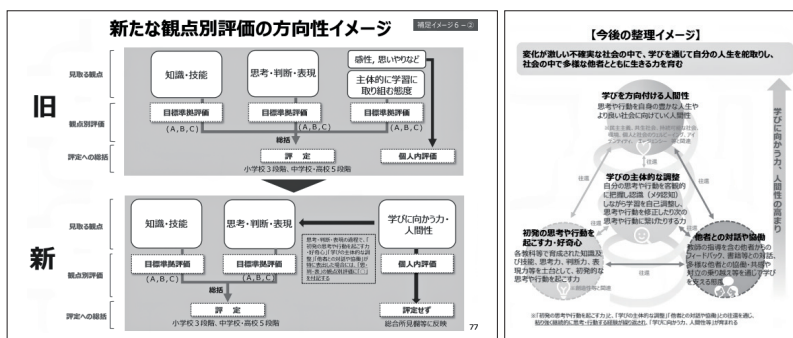
評価をしないなんて話は全くありません。学びに向かう力・人間性、主体的に学習に取り組む態度は、これまで以上に重要だと考えているし、知識・技能、思考・判断・表現をよりハンドリング(柔軟に運用)していく、さらに重要なものと捉えているわけです。

ですから、そのようなお考えの方や、お話をされる方がいたら、そんなことはないんだよとちゃんとお話ししていただければと思います。ただ、この学びに向かう力・人間性、主体的に学習に取り組む態度については、少し考え方を丁寧に整理していこうと。

これまで態度については、自己調整や粘り強さといったものを二軸で示したので、態度がちよっとクリアになった。しかしながら、逆に言うと形骸化している傾向が、つまり何でもかんでも粘り強さみたいになってはいないか。

したがって、もうちよっとこ

こを豊かに捉えるために、左下の初発、右側の協働、真ん中のメタ認知し調整する。これらにもうちよっと広げてはどうか。



〈R7_0925 教育課程企画特別部会論点整理より抜粋〉

初発ってというのは自分からアクションを起こすこととすし、(協働は)ともってことで、それを自分でコントロールする。この辺のところを大事にすることで、今までの二軸よりも、この態度のところを豊かになるのではないか、という議論をベースにしながらも、この上にある考えを下の方に整理し

どういうことかというところ、一番右側にある主体的に学習に取り組む態度については、これまで目標準拠評価を取っていたんです。知識・技能も思考・判断・表現も学びに向かう力・人間性、主体的に学習に取り組む態度も、目標準拠評価を取っていた。

目標準拠評価ってというのは、評価基準を定めてパス(合格)かノンパス(不合格)かで判断をしていた。クリアすればいいと、こういうことになっていったんだけれども、この学びに向かう力・人間性、主体的に学習に取り組む態度については、どうも評価基準を超えたか超えないかという判断というのは難しいのではないかと、ということ。むしろそのことをするがゆえに、形式的なものになって、提出物だとか忘れ物みたいな形骸化した形になって、矮小化されているのではないかと、という声も結構多いわけです。

ですので、ここをむしろ個人内評価に変えてはどうか。個人内評価というのは、その子のよさや可能性、変化や成長、変容といったものを、もうちよっと広く、長い時間で見取ることでよって、その子のよさを認めていきましよう。

こういう考え方にしようという事です。これはおそらく主体的に学習に取り組む態度、学びに向かう力・人間性とは、マッチングのいい評価の仕方なんではないかと思うんです。

ただ問題は、そうすることによって、この部分の評価結果が、所見になるので、評定に入り込まないみたいなことが起きてくると、大事だと言っているものがちよっと手薄になるというのか、取り扱いが不十分になる。先生方の指導が手薄になってしまうのではないかと、このような心配もあるわけです。

あるいは中学校の先生方にしてみれば、それが入試のための重要な情報になっていくところでも、そこでも、この両者の間の点線のところに書いてあるんですが、この学びに向かう力・人間性というのは、どちらかというところのプロダクトとしての知識・技能、プロセスとしての思考・判断・表現、このプロセスと非常に親和性高く表れるわけです。

つまり、自分からチャレンジするってというのは、何か発表のシーンで出てくるわけですね。友達と協力するというのは話し合いのシーンに出たりするわけです。となると、思考・判断・表現を見て評価しているときに、この学びに向かう力・人間性が顕著に表れたら、そこに丸をつけていくというような形をとれば、結果的にそれが評定の方にも反映されるのではないかと、いうような議論が出てくるということ。したがって、評価をしないなんてことはないんだけど、今後の話題としては、それを評

定にどんなふう反映するかということは話題になっていて、とりわけ中学校の先生方にとっては重要なポイントになってくるのではないかなというところで、お伝えを申し上げます。

ここまですべての主要な論点を、ものすごくちよつと駆け足でレビューしてきたという事になります。

とりわけ重要なことは、今、御紹介してきたことは、この先の学習指導要領の未来の話ではなくて、実はもう既に今、日々行っている授業と直結している、あるいは日々皆さんが編成している教育課程と、常にシンクロしているということだと私は思います。

(以下、省略)

この後、「資質・能力の育成」「知識のネットワーク化・精緻化」「コネクト」「アウトプット」などについて、実際に子供たちが学ぶ姿や対話する様子から、解説を交えてお話しただきました。

詳細につきましては、全日本中学校長会発行「中学校No.八六八の特集記事」を御覧ください。

(朝日中 幸坂 浩)

福井県中学校教育研究会だより



教員の学びをつなぎ、

教員こそ主体的に学べ

福井県中学校教育研究会

会長 田中 典子
(進明中学校)

今年度開催した福井県中学校教育研究会は、前年度の教科等の部会長が県下六九の各中学校の教員の現状を踏まえ、より効果的な研修の場、教員同士のつながりを強め、さらなる授業改善の意欲向上となるように工夫された研究会でした。それは、参加人数が大幅に増加したこと、研究会の参加が刺激と学びがあり、次の意欲につながっているという事後アンケートの御意見が多かったことから伺えました。

べき内容は、単なる知識の伝達を超え、生徒の主体的な学びを支援するファシリテータとしての役割を強化することにあります。ある教科では、読解力や表現力の育成に加え、対話的な学びを促す授業設計が求められます。生徒が自分の考えを言語化し、他者と共有する力を育むために、教員は問いの立て方や話し合いの進行技術を磨く必要があります。

このように、教員は各教科の専門性に加え、学習者中心の授業づくりを支えるファシリテータとしての力を継続的に学び、磨いていくことが、これからの教育において不可欠です。

昨年度、福井県で開催された北信越中学校総合競技大会に際しましては、先生方をはじめ、各市町、関係競技団体、そして地域の皆様より多大なる御支援と御協力を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。



北信越大会お礼!

福井県中学校体育連盟

会長 竹野 亨
(成和中学校)

「競技を続けてきてよかった」と心から思える、思い出深い大会になったことと思います。その姿は、多くの人々に感動と勇気を与えてくれました。「おもてなしの心あふれる大会」を目指して準備を進めてまいりましたが、他県の関係者からは、「生徒役員がさわやかで晴れやかな気持ちになった」や「先生方の運営がスムーズで、よく連携が図られていると感じた」といったお褒めの言葉をいただきました。運営に携わってくださった関係

の皆様は、改めて深く感謝申し上げます。

一方で、現在、部活動の地域展開が進められており、生徒のスポーツ活動を地域が支える仕組みづくりが求められています。しかし、指導者や活動場所の確保、安全管理など、多くの課題が残されています。中体連としても、今後の大会運営を含めた在り方について、各地区中体連や、関係機関、地域との連携を一層進め、将来を見据えながら着実に進めていくことが重要であるとと考えております。

引き続き、中体連活動への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。



校長三昧 点眼水

自分を育ててくれた教員生活

明道中学校長 野路 佳男



今、三十七年間の教員生活を振り返ると、様々な思いがよみがえってきます。その中でも、なぜかつらかったことが真つ先に思い出されます。楽しかったことも数え切れないほどあるのに、最初に浮かぶのは苦勞した場面です。仕事に向かう朝、気合を入れて玄関を出たことも何度もありません。常に自分に「逃げてはいけない」「逃げるような人間になつてはいけない」と言い聞かせながら、今まで歩んできました。

本当にありがたいことでした。自分のような者が、校長として教員生活を終えることができたのも、学校という職場が自分を鍛え、気づかせ、人として成長させてくれたからにはかなりません。最後に、これまでお世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。そして、これからの教育界を担っていく後輩の校長先生方に、心からエールを送りたいと思います。

全てのことに意義あり

進明中学校長 田中 典子



役職定年を迎えるにあたり、教員生活を今しみじみと振り返っています。

多面的に育てることができるとあると思っています。思考力や表現力、論理的な考え方、探究心、感性を磨き、身体と心の健康を支え、創造力を養い、教科ごとの学びが生徒の内面に多様な刺激を与える三年間です。それぞれの教員が異なる視点から生徒と関わることで、個性や可能性を引き出し、より豊かな人間形成につながる、中学校ならではの教育体制の魅力であり、教師という職業のやりがいでもあると思っています。

これまで得た経験と想いを胸に、今まで、関わってくださった全ての方々に全て意義があったことを理解し、感謝の気持ちしかありません。これまで本当に、ありがとうございます。

振り返ると…

灯明寺中学校長 佐藤 勉



足羽郡（現福井市）美山中学校に新採用教諭として赴任してから

今日まで、まさに光陰矢の如し、実にアツと言う間の教員人生だつたと感じます。そして、改めて振り返ってみても、一片の悔いなく、やりきった感があり（「もう胸一杯！」がふさわしいかも）、この仕事を選んだことに充実感と誇りを感じます。素直に「本当によくがんばった！」と、自分で自分を褒めたいです。そして今、改めて断言できるのは、この仕事は決して「ブラック」ではなく、「ブライト」だということです。

とです。新採用時の美山の子供たちも、今の灯中の子供たちも、全くもって「同じ」です。いつの時代も子供たちは純粋ですし、とても素直です。だからこそ、私たちの教育のあり方次第で、子供たちの姿は変わることを肝に銘じ、日々の教育活動にあたるのが大事だと強く感じます。

しかし、今の学校には人的不足や教員の資質低下をはじめとして、様々な課題や難題が山積しています。そして、それらをOJTとか学校力でなんとかしろ！と言われてもまさに机上の論であり、行政主導で福井の未来をコントロールするのではなく、「学校裁量」の言葉で責任を丸投げする今の現実（世の流れ）に強い怒りと憤りを感じます。

人は人で育ちます。そして、「教育こそ未来」だと思えます。ぜひ教育に沢山のお金を投資し、今後益々減少し貴重な宝となる子供たちに、「人の道」を正しく教えることができる人材の発掘を今こそ実現すべきだと考えます。

福井の教育の未来は、やはり「ブライト」であることを心から切に祈ります。

主体性を育む

松岡中学校長 野村 博明



生徒の主体性を引き出した教員生活でした。

校長となり、主体性を育むには、まず「時間的なゆとり」が不可欠

と考え、令和四年度から「四五分授業十三〇分松中タイム」を導入。部活動の地域展開も進め、土日は外部指導者、平日は観察員制度を設けました。こうして生み出した時間は、教員研修や生徒の主体的活動に活用しました。ふるさと教育の一環として進めた地域ボランティアも、休日に教員が関与せずとも生徒が参加できる体制を地域に依頼し、令和五年度には延べ七割の生徒が参加する活動に。地域の方からも喜ばれています。

地域の方からも喜ばれています。校訓「自彊不息」を体現するため、松岡中学校オリジナルの「マイノート」を作成。自分見つめと習慣化を目指して五年、卒業生からの要望もあり、町内の文房具店に置かれることになりました。タブレット活用では、家庭への持ち帰りを推進。対話力を育むためトリオ活動にも力を入れました。

他にも、探求活動の発表会を年二回、実行委員を中心に実施。現在、生徒総会の話題は生徒会組織再編に進み、様々な取組が生徒会活動に組み込まれています。教員研修に外部講師を招いたコーチングも取り入れました。

生徒の主体性を育む魅力ある学校づくりを目指し、教員・生徒・家庭地域の方々と対話・実践してきた時間は、私にとって学びの多い時間でした。「変化し続ける過程にこそ学びがある」と感じた教員生活でした。出会った方々に心から感謝申し上げます。



環境に育てられた私

丸岡中学校長 鈴木 秀卓



平成二年春。初任校は鯖江市吉川小学校でした。当校は、あくまで本務校であり、私は教科補充要員として、幾度も兼務辞令が発令されました。鯖江市内の二つの小学校と二つの中学校、勝山市内の二つの小学校と、本務校を含め、一年間で五つの学校に勤務しました。振り返れば、この時期の複数校勤務は、私にとって大きな財産だと思っています。

地元の坂井地区に戻ってからは、小学校よりも中学校勤務が長くなり、教科指導、生徒指導(支援)、部活動指導等、多様な経験を積ませていただきました。また、県内初の教科センターシステム導入の中学校では、研究主任を務めながら、教職大学院で学ぶ機会もいただきました。新たな授業観に目覚めたのもこのころでした。その後、教育行政にも携わり、客観的に学校を見つめることができたとともに、これまでには経験のない仕事の厳しさも味わうことができました。

春江中学校での教頭を経て、福井市長橋小学校長としての二年間。純朴な児童、美しい景色かつ温かい地域性に包まれていたこと、活気と団結力にあふれた福井市校長会組織に参画できたこと、これら全てが貴重な経験であり、新鮮の極みでした。そして、私の集大成は、丸岡中学校長としての三年間。生徒、保護者、地域住民、教

職員のすべてに恵まれ、こうして退職に至ることができました。最後になりましたが、これまで私に与えられたすべての環境に対し、…、ありがとうございます。

思えば遠くに来たもんだ

勝山南部中学校長 田邊 千智



私が三八年間、勤務している間にいろいろなことが変わっていききました。い

つの時代も教育界は時々の社会の波に翻弄されています。けれど社会を支えているのもまた教育です。教育をおろそかにしたら国は滅びると思います。「教育は人なり」。これは私の採用試験の面接で問われた言葉です。そしてもう一つは「不易と流行」。この二つの言葉は私の中にずっと存在し続けていました。学習指導要領が改定されても、国が求めるものが変わっても、どれだけ振り子が振れようとも、変わらないものはある、そう思ってきました。時代遅れと言われようとも、集団行動のあれこれは絶対に譲りませんでした。叱咤激励による運動量の確保や、時間を守ること、できる、できないじゃなくて、やろうとするかどうかだということも常に子供たちに言い聞かせてきました。今の授業では考えられないこともやってきました。こんなことを言うところ、どんなに素晴らしい信念をもつて教育にあつたつてきたのかと、誤解されるかもしれないませんが、私はいたつて事なかれ主義で長いものに巻かれたふり

をする人間です。それでも、人が人を育てること、教育の根幹をなすものについては譲りたくありませんでした。

管理職となり定年を迎える今、自分の勝手な思いを若い人たちに押し付けるつもりはありません。今までの傍若無人な私を論し支えてくださった全ての人や事に感謝し、老兵は去るのみです。

感謝

武生第一中学校長 久島 晋



新採用として赴任した明道中学校で二年生担任としての一年間を

終え、迎えた年度はじめの職員会議。他の教員の予想に反して、三年生担任の欄に私の名前がありました。職員会議後に、「企画委員会のメンバー全員が反対したが、校長先生が『三年生担任をさせる』と言って聞かなかった」と教えられました。校長に「どうして三年生をもたせてくれたのですか」と尋ねてみたところ、「やんちゃな子どもたちの側にいつも君の姿があった・・・」と答えが返ってきました。「自分のように教員との寂しい関わりの中での学校生活を目の前の子供たちに送らせたくない。」という自分の信念を分かってくださる方がいると安堵すると同時に、「この想いを忘れずに残りの教員人生を歩んでいこうと決意したことを覚えていきます。

以来、数多くの生徒とともに楽しく学校生活を送ってきました。

でたくさんの方々との出会ってつながりができたことが私の人生の宝物です。

管理職として自分を振り返ってみると、幸せなことばかりでした。小学校と中学校の両方で教頭と勤務したのは県内唯一の分校がある学校でした。「笑顔で登校 満足顔で下校」をキャッチフレーズにして、学校運営に取り組んできました。このキャッチフレーズは生徒や先生方に浸透して、先生方は常にこれを意識して教育活動を行ってくれました。それが実を結んで、生徒の笑顔と満足顔で溢れる明るく活気のある学校になりました。この二中みんなの笑顔と満足顔も私の宝物です。保護者や地域の皆様、そして何より生徒や先生方に恵まれて、私自身が「笑顔で出勤、満足顔で退勤」する毎日でした。

最後に、これまでに出会い、お世話になった方々に深い感謝の思いをお伝えしたいと思います。皆様本当にありがとうございます。

笑顔と満足顔

武生第二中学校長 近藤 雅樹



新採用は途中採用で、平成元年九月二日春山小学校の病休代でした。春

山小学校には籍があつただけで、明倫中、日之出小に相次いで勤務し、翌年から旧今立町の岡本小学校に赴任しました。その後中学校、グアム日本人学校、小学校、中学校、県外派遣二年(和歌山県内での異動の辞令も出ました)を経て管理職になりました。国外と県外勤務を経験し、福井県の教育の素晴らしさを実感し、その中で働くことができたこと、いろいろな縁



「念い」を紡ぎ、未来へつなぐ
南越前中学校長 今村 憲和



私が今庄中学校に新任校長として赴任したのは、令和二年の新型

コロナの影響が全国を覆い始めた頃でした。生徒たちの表情がマスクに隠れ、行事や部活動は制限され、学校として最も大切にしてきた「ともに過ごす時間」そのものが奪われる日々。それでも、子供たちや教職員はそれぞれの立場で懸命に工夫し、何ができるかを考え続けてくれました。このとき私が学んだのは、どんな逆境にあつても人の「念い」があれば、学校は前へ進むことができるということです。生徒の成長を信じる念い、仲間と学び合う学校を取り戻したいという念い、地域とつながり続けたいという念い……その重なりが、今庄中学校の教育を支えていました。そして令和四年度、町内三中学校が統合し、新たに南越前中学校が誕生しました。南越前中学校の開校は、生徒にとつても教職員にとつても、そして地域にとつても新しい挑戦の連続でした。その中で私が大切に続けたのも、やはり「念い」でした。「この学校が、生徒にとつて胸を張って通える場所であつてほしい」「多様な価値観がともに響き合う学校にしたい」「地域に開かれ、地域と育つ学校でありたい」「そんな念いを、教職員とともに語り合い、時に立ち止まり、時に励まし合いながら育ててきました。開校から四年が経ち、南越前中

学校には、生徒同士が尊重し合い、挑戦を恐れず、一人一人が自分らしさを発揮できる文化が確かな形になりつつあります。行事で輝く生徒の姿、地域の方とともに活動する生徒の笑顔、互いの違いを認め合おうとする優しさ。これらは全て、関わった皆様の念いが積み重なった結晶にほかなりません。振り返れば、六年間はあつという間でした。しかし、子供たちとともに過ごした日々、教職員と真剣に議論した時間、地域の方々の温かい言葉の数々は、私にとつてかけがえない財産となりました。

第二の人生の夢、趣味が教育！
小島 義和
小島 義和



私の教員人生で最も特別で貴重な経験は、「起業家精神育成教育」と

の出会いでした。今でこそ「アントレプレナーシップ」という言葉が浸透してきましたが、当初は理解されにくく、「子供に金儲けを教えるとはけしからん」「起業家を美化しすぎだ」といった批判も受けました。

学年全員を「社員」とし、生徒が「社長」「役員」となり、資金繰りから商品開発、営業、販売までを担うこの活動は、教員にとつても未知の挑戦でした。修学旅行先での限られた時間内での販売をゴール

に、次々生じる課題に最適解を探り続ける日々は困難でありながらも刺激に満ちていました。顧問として生徒幹部とともに悩み、同じ目線で語り合ったことは忘れられません。とりわけ、ある商品の失敗を共有した際、「社員教育の大切さと難しさ」について交わした対話は私の原点です。

生徒たちはこの経験を通じ、多様な力が集まることが組織を強くすること、どんな力でも精一杯発揮すれば社会に貢献できることを実感してくれたと信じています。

次期指導要領では、金融教育が重視されるようです。起業家精神育成教育とどこまで結びつくかは分かりませんが、社会と直結するこの学びは未来を生き抜く力となるはず。教員としての「仕事」だった教育を、これからは「趣味」として続け、若者の挑戦を支えていくことを夢見ています。

Dream can do!

出会い、つなぐに感謝
高浜中学校長 平田 晃弘



振り返れば、教育現場で積み重ねた一日の努力が、「量が質に転化する」という言葉どおり、私自身を成長させてくれました。

「校長先生、ぜひ召し上がってください」と笑顔で料理を運ぶ生徒、朝の昇降口で交わす元気な挨拶。教職員からの「ぜひ、これをやってみたいんです」という前向きな提案やサブライズの誕生会、地域の方々

らの「子供が声をかけてくれて元気が出る」という感謝の言葉。生徒は孫、教職員は子供、地域の方々には御近所さん。学校全体が一つの家族のように温かな眼差しに包まれ、子育てをともにしているような感覚になることが度々ありました。

こうした何気ない笑顔や交流、地域とのつながりの一つが、未来の自分を形づくる糧となり、宝物になったと実感しています。「過去の経験が未来の自分をつくる」という言葉は、教育に携わる者にとつて、子供たちにも自分自身にも当てはまる真理だと感じます。今後は、一教員としての原点に立ち返り、これまで培った知見を地域や後進のために生かしていきたいと思えます。

最後に、非力な私を支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

笑顔と本気
大飯中学校長 渡邊 博司



校長として赴任した大飯中学校の新任式で、私は自分の好きなもの

について話しました。「私の好きなものは笑顔と本気です。笑顔と本気でいっぱいの学校を作っていきたい」と生徒に呼びかけました。また、全校生徒への校長講話などの機会には、常に「ありがとう」の言葉を忘れないよう心がけました。このような私の言葉に対して、にこやかな表情を見せる生

徒や、引き締まった表情になる生徒がいました。

校長の笑顔と本気が教職員の笑顔と本気につながり、教職員の笑顔と本気が生徒の笑顔と本気を育む。そう信じて、毎日校長職に向き合ってきました。そして、心からの感謝の言葉と気持ちをもって教職員や保護者・地域の方々と接してきました。

振り返ると、高浜中学校から始まった三〇年余りの教員生活は、ほぼ中学校の現場で過ごしてきました。その間、国語科の授業と学級経営をはじめ、生徒指導や部活動指導などに真摯に向き合い、時には歯を食いしばっていました。上手いかわないことが多く、たくさん迷惑をかけてきたことを反省しています。しかし、良き同僚、素晴らしい生徒と保護者に囲まれて過ごした毎日は、私にとつて何物にも代え難い宝物です。

反省と宝物であふれかえっていますが、後悔はありません。その時々々に最善を尽くし、誠実に職務を全うしてきました。「我が教員人生に二片の悔いなし」

編集後記

第一五二号を無事にお届けできることになりました。長きにわたり教育に尽くされた歩みの言葉を道標として、次代へと力強く歩みを進めてまいります。御多忙の折、寄稿を賜りました先生方に心より感謝申し上げます。
「広報部」